

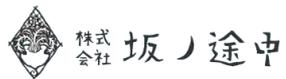
Impact Report

COFFEE-Japan PROJECT in LAOS

海ノ向こうコーヒー

UMINOMUKOU COFFEE

Imagine where the story of coffee begins.



About

本レポートについて

海ノ向こうコーヒーでは、2024年から2025年にかけてラオスのルアンパバーンにて、国連WFP、SAFFRON COFFEE(サフロンコーヒー)とともに「COFFEE-Japan PROJECT」を実施しました。プロジェクトによって現時点で見えてきた価値や意味を確認すること、改善点を見つめ直し未来の取り組みに活かすことを目的として、このインパクトレポートを作成しました。活動の背景にある現地の課題や、スタッフ4名が村をまわり実施したヒアリング調査から得たリアルな声を交えつつまとめています。このレポートがラオスだけでなく、コーヒーの向こう側にある産地のことを想像するきっかけになれば幸いです。



Table of Contents

目次

- | | |
|-----------------------------------|-----------------|
| 1. Basic Information | 基礎情報 |
| 2. Overview | プロジェクトの概要 |
| 3. Target & Background | 村人の暮らしから見えてきたこと |
| 4. Issue | 課題 |
| 5. Activity | プロジェクトの実施内容 |
| 6. Outcome & Impact | 成果とインパクト |
| 7. Closing | 最後に |

Basic Information

基礎情報

ラオスについて

多民族が織りなす「森と山」の国

ラオスは東南アジア唯一の内陸国であり、国土の多くを山岳地帯や高原が占める「森と山の国」です。人口は約765万人。ラオ族を中心に多様な民族が暮らす多民族国家であり、公用語にはラオス語が使われています。経済の中心は依然として農業（特に稲作）ですが、フランス植民地時代に始まったコーヒー栽培も盛んです。コーヒーの主要産地は南部のボラベン高原ですが、近年では本プロジェクトの対象地、北部の山岳地帯でも、新たな換金作物として導入が進んできています。

北部の農村を取り巻く状況

30～40年ほど前から政府による集落を高地から低地の幹線道路沿いに移住させる事業が行われてきました*1。対象村の中には集落が移動しアクセスが向上した地域がある一方で、ポンサイ郡のように、未舗装の悪路でしかアクセスできない村も依然として多く残されています。対象地全体として見ればインフラはまだ十分とは言えず、生活環境の向上には多くの課題が残されています。

暮らしの中心にある農業

かつては焼畑による陸稲栽培や森での狩猟採集を中心とした、自給自足の暮らしが営まれていました。現在も、主食であるお米は焼畑（陸稲）によって自給していますが、森林保全を目的とした政府による焼畑の制限や人口増加により、十分な休耕期間がとれず、昔とは違う土地収奪的な焼畑*2にならざるを得ない場合もあります。こうした変化の中で、人々はハトムギなどの換金作物の導入や家畜を組み合わせ、現金収入を得ることで暮らしを支えてきました。

なぜコーヒーを導入するのか

既存の換金作物とは異なり、コーヒーが焼畑ではなく森を守りながら栽培できるからです。森林保全と現金収入の両立を可能にする、これからの暮らしの新たな選択肢として期待されています。

1. インタビューより
2. 焼畑は適切な耕作・休耕サイクルを守っていれば、環境的には持続可能な農法と言われている。

調査について

2025年9月8日～14日にかけて、プロジェクト対象となる全8村を訪問し、聞き取り調査を実施しました。

プロジェクト参加世帯の方々に集まってもらい、男性、女性グループに分かれて、半構造化インタビューの形式で行われました。



表1 調査項目

1. 村情報

- ・村の成り立ち、村の開始年
- ・水源の位置、取水方法、不足状況
- ・換金作物の導入時期と経緯
- ・森林、周囲の自然環境の変化

2. 世帯情報

- ・個人の属性: 名前、年齢、性別、家族構成、民族
- ・収入源、就労状況: 家畜、換金作物等、家族の出稼ぎの有無
- ・現金の使途: 直近1年での高額出費と現金の出所
- ・土地利用状況: 用途ごとの畑の面積、枚数、焼畑サイクル
- ・食材の調達源、自給か購入か: 昨日食べたもの、市場からの購入物
- ・現在の暮らしに対する意識

3. コーヒー栽培の導入状況

- ・苗木導入: 受け取った本数、生育状況(苗木の生存率)
- ・栽培状況と技術、知識の習得状況: 苗木の症状、トレーニングで学びたいこと
- ・品質管理と出荷状況: プロセスセンターの導入状況、加工をしているか
- ・インプット: 化学肥料と農薬、堆肥の使用状況
- ・アグロフォレストリーの状況: 混作、コンパニオンプランツ
- ・コーヒー栽培から得られた収入

4. CJPに対する意識

- ・参加理由
- ・市場アクセスや販売先に対する認識
- ・運営の持続性に対する期待・懸念
- ・地域社会や家族への影響

現地に行ったからこそ 体感できたこと



坂ノ途中の研究室 研究員
渡邊春菜

今回、研究員として調査に同行しました。私たちが調査に向かったのは雨季の終わり。赤土の悪路に阻まれ、泥まみれになりながらスタックした車を押し、やっとの思いで辿り着いた村もありました。

インタビューを通じて、道中に見た美しいパッチワークのような焼畑の風景は、片道2時間の山道を歩く過酷な労働の上に成り立っていることを知りました。でも、「食べていくためには焼畑をやめられない」。そんな切実な現実を目の当たりにしました。

一方で、村にはインスタントコーヒーや旨味調味料、そしてスマートフォンが普及し始めており、自給自足の生活と貨幣経済が混ざり合う村のリアルをまざまざと感じました。



Overview

プロジェクトの概要

プロジェクト概要

2023年11月、国連WFPラオス事務所と契約を締結。貧困率の高い地域に暮らす小規模農家とその家族の所得向上を通じて、食料および栄養の安全保障を強化することを目的に、国連WFPラオス事務所、ラオスでコーヒー生産に取り組むSAFFRON COFFEE(サフロンコーヒー)、海ノ向こうコーヒーの3者で進めてきたプロジェクトです。ラオス北部のルアンパバーン県に位置する8村に暮らす、5歳以下の子どもたちや妊産婦さんのいる家庭など、特にサポートの必要な約300世帯が対象とし、所得向上の手段として、コーヒーの生産を支援してきました。

プロジェクトの特徴、強み

コーヒー栽培や生産方法の導入だけでなく、その後の市場アクセスも確保できているということが海ノ向こうコーヒーがプロジェクトに関わることの強みです。

日本国内では、ラオスコーヒーの認知拡大を目指し、プロジェクト地域で生産されたものを輸入し、販売していくことで、プロジェクト期間終了後もつづく関係性の構築を目指しています。



プロジェクトのTheory of Change

| Target 対象 | Issue 課題 | Activity 活動 | Outcome 生み出したい変化 | | GOAL 最終目標 |
|---|---|---|--------------------------|------------------------|-----------------------------|
| ラオス北部 ルアンパバー ン県に位置す る山岳地帯の 8村 | <p><地域の課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・洪水など災害リスクの高さ ・貧困率は都市部の約3倍 ・現金収入の選択肢の少なさ <p><地域住民の課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの発育阻害 ・妊産婦さんの栄養不足 |  <p><WFPの担当領域></p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象家庭に対する現金給付 ・栄養価の高い農作物の栽培 ・家畜などの飼育方法、乳幼児の食事、衛生に関するレクチャー | 栄養状態の改善 | 食の多様性を増やすことによる食生活基盤の強化 | 社会変化に対するレジリエンス(回復力、適応能力)の獲得 |
| | <p><プロジェクトにおけるコーヒー栽培導入の課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・コーヒー栽培の知識・技術の不足 ・ラオスのコーヒーの認知度の低さ ・流通、マーケティング側面の課題 | <p>連携</p>   <p><私たちとサフロンコーヒーの担当領域></p> <ul style="list-style-type: none"> ・コーヒーの苗木の配布 ・コーヒー栽培や加工に関するトレーニング ・輸出入と流通販売 ・ラオスコーヒーの認知度引き上げ | 環境保全と両立させるコーヒー栽培技術の定着と向上 | コーヒーの収量向上と農家さんの収入安定 | |

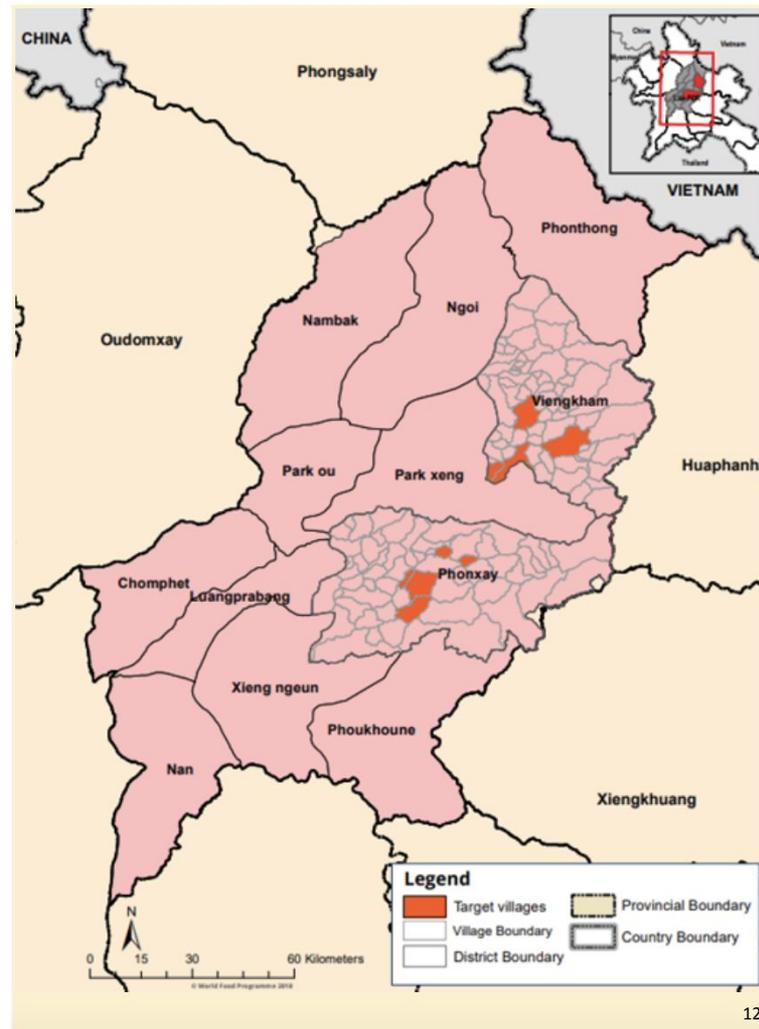
Target & Background

村人の暮らしから見えてきたこと

対象村の基本情報

ラオス北部、ルアンパバーン県に位置する8村が対象です。
モン族やクム族、テン族など、山岳少数民族の人々が暮らしています。

| 群 | 村 | 人口 | 世帯数 | 民族 | 標高 |
|-------|----------|-------|-----|-------|---------------|
| ボンサイ | チョムチアン | 1,507 | 216 | モン | 約1,190~1,230m |
| | ロンラット | 296 | 44 | モン | 約1,530m |
| | ホーアイロンソン | 368 | 58 | モン | 約1,200m |
| | ファドイ | 684 | 119 | クム、モン | 約1,280~1,315m |
| ビエンカム | フエカイ | 394 | 74 | クム | 約1,050~1,130m |
| | ブートン | 436 | 71 | クム | 約1,080~1,120m |
| | サー | 373 | 65 | テン | 約820~1,180m |
| | ブーカム | 204 | 37 | クム | 約960 ~1,010m |



なぜ村で現金収入が必要なのか

定住政策以降のインフラ整備により、村には町とつながる道ができました。これにより市場へのアクセスができるようになり、町で仕入れたものを村で販売する人も出てきました。村外の人との交流も以前よりも活発になったといえます。

村人は暮らしが便利になったと話す一方で、それは、いつの間にか村の中にも貨幣経済が浸透してきているということなのです。例えば、子どもたちを学校に行かせるための費用や制服代、病気になったときの医療費や病院までの交通費などが必要です。

Interview Note



山を下りて、道のある村にすむ

ビエンカム群のプーカム村。2004年に定住政策によってできた村です。山のほうから下りてきた人々が住んでいます。政府が道をつくり、村人は自分たちで家をつくりました。

人々は口をそろえて「ここに住む方がいい。少し下った先にあるパクセンの町までは、村から道がつながっていて、そこには市場や病院、学校があるから」と言います。



なぜコーヒーなのか①

村の暮らしと働き方から考える

本当は家族と一緒に過ごしたいのにも関わらず、出稼ぎのために村を離れざるを得ない人がいます。しかし雨季になると大雨で道が寸断されることもあり、村から出ることが困難な状況になることも多くあります。

これまでの現金の主な収入源といえば、コメやハトムギ、家畜。コメの畑が家から遠く、特に高齢者にはそこまで行くのが難しかったり、家畜が病気になって出荷できなかったりと、思うように現金収入が得られないこともあります。

コーヒーであれば、庭先や裏庭など家の近くで栽培が可能です。家族とともに暮らしながら、現金収入を得ることができるのです。

Interview Note



焼畑農業の苦勞

ビエンカム郡のフエカイ村のワンさん。牛やバッファローなどの家畜を飼い、コメやハトムギを育てて生計を立てています。「コメやハトムギの畑までは、片道2時間。夫と息子はそこへ毎日通っています。作業はすべて手作業。収穫期や焼畑の時期などの繁忙期には畑に寝泊りしています。」



なぜコーヒーなのか②

環境の側面から考える

焼畑は、村人たちの育てているコメやハトムギの栽培、さらに家畜用の牧草地づくりのために行われています。しかし、生産量を増やすために適切な休閑サイクルを確保できず、同じ土地で毎年焼畑を行う村もあります。森林が大事だと認識しながらも収入のため焼畑をせざるを得ず、過度な焼畑が土壌の劣化・流出や森林減少を招いています。

一方、コーヒーは環境負荷の小さい換金作物のひとつ。日陰を好むため、既存の森林環境を維持しながら栽培する「アグロフォレストリー」に適した作物です。コーヒーは収穫までに3~4年かかるため、すぐに現金収入には結びつきませんが、少なくとも現存する森林を守ることができます。

Interview Note



村の人々にとっての「森」という存在

村に住む人々は、もともと山や森に暮らして来た人々です。「昔は野生動物が今よりもたくさんいて、狩りをしていました」「今も水や食料は森から調達します」「森のおかげで恵みの雨が降って、湿度や涼しさを保つことができます」と、村の人々にとって森は昔も今も変わらず大事な存在です。



なぜコーヒーなのか③

経済の側面から考える

コーヒーは国際市場で取り引きをされる合法的な換金作物であり、国家として大事な外貨獲得の手段です。しかしながら価格の乱高下のある国際市場では、生産者は時として弱い立場に陥る可能性も否めません。

グローバルな商流ではないがしるにされがちな、強固で密な関係性を築いていくこと、それを元にバリューチェーンを構築することこそが、持続可能な生産と経済発展につながると考えています。

Interview Note



売れる保証がある安心感

農家さんたちに、このプロジェクトへの参加の動機を尋ねると、「あなたたち(坂ノ途中)がいるからサフロンが我々からコーヒーを買ってくれる。その保証があるから、安心して栽培にも取り組める。」そんな言葉が返ってきました。



Issue
課題

COFFEE - Japan PROJECTが向き合う課題

＜地域の課題＞

プロジェクトの対象となっている北部は、インフラの整備が十分ではありません。洪水が起こると、道は寸断され、陸の孤島になることも。緊急事態が発生したときの対応も遅れてしまいます。

また都市部と比べると貧困率は約3倍、現金収入の選択肢も少なく、都市部や海外に出稼ぎに行かざるを得ない人々もいます。

＜地域住民の課題＞

北部地域は山岳部に住む少数民族が多く、貧困率は都市部の約3倍とされています。また、WFPによるとラオス北部地域では5歳以下の子どもの33%が発育阻害と言われ、妊産婦の半数以上が推奨される栄養量に達していません。ラオス語で「Noi(ノイ)」という言葉があります。「小さい」という意味で、ラオスではノイさんや〇〇ノイさんという名前のの人にたくさん出会います。

＜プロジェクトにおけるコーヒー栽培導入の課題＞

現在はラオスのコーヒー生産のほとんどが南部のボラベン高原周辺地域で行われていますが、近年は北部でもコーヒー栽培が導入されつつあります。標高や気候などコーヒー栽培に適した条件が揃っている場所が多く、コーヒーの生産地としてのポテンシャルのある地域です。しかし、北部の農家さんのほとんどは零細農家で、コーヒー栽培を始めるために必要な苗木や設備への初期投資は大きな負担になります。また、コーヒー栽培の歴史が浅く、栽培技術や知識が十分に行き渡っていないのが現状です。

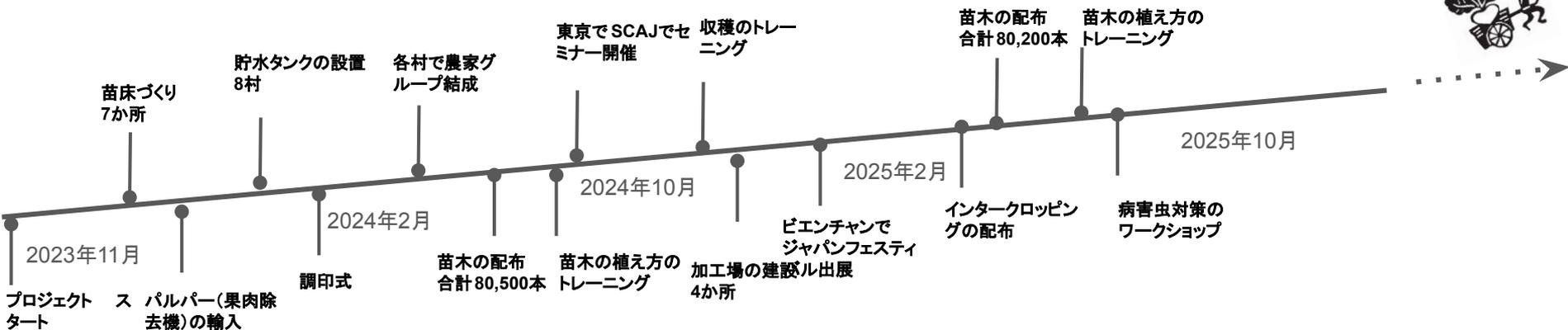
苗を配布しても、「植えたもののどんどん伸びていく木の管理方法が分からない」「病気になった木はどう対処したらいいか」、農家さんからはそんな声も聞こえてきます。

また、北部産のコーヒーはラオス全体のコーヒー生産量のわずか5%ほどとも言われ、日本ではまだ認知度が低いのが現状です。

Activity

プロジェクトの実施内容

プロジェクトのあゆみ



初期

農家グループの結成やリーダー選出、苗床整備、加工機材設置など収穫準備が本格化していきました。水不足の課題はありましたが、サフロンは育苗と組織化、海ノ向こうコーヒーは広報活動を進めました。

中期

苗木の配布と植え方のトレーニングを中心に生産基盤を強化し、坂ノ途中はイベント出展やメディア露出など広報活動を進めました。またこの期間、加工施設建設が始まり、2024/2025クロープの収穫期を迎えました。

後期

加工場の建設が進められ、収穫・加工技術に関するトレーニングを実施しました。この期間に4か所目の加工場の設置地を決定。対象の全村で苗床整備と資材配布を完了しました。プロジェクト2年目では新たに76世帯が参加し、混植導入など持続性強化が進められました。

最終期

剪定や病害虫防除などに関するトレーニングを行い、海ノ向こうコーヒーではニュークロープの販売を開始しました。合計で約2万本の苗木を配布し、加工施設や給水設備も建設が終わり、乾燥設備も改良を加えました。最終のインパクト調査も実施しました。

苗木の栽培と配布

配布した苗木は8村合計で約160,000本。サフロンコーヒーでは、収量が確保できるとともに病害虫に強いカティモール品種を採用し、種から苗木の状態まで育てて村の農家さんへ配布しました。一度に運べる本数は限られているため、苗床からそれぞれの村まで何往復もかけて運びました。



“来年はもっと苗木をたくさん植えたい”

ポンサイ郡 ホーアイロンソン村 クーヤーさん
35歳 女性

“植えたばかりでまだ変化はわからない”

ポンサイ郡 チョムチアン村 ヤーセンさん
45歳 男性ほか多数

トレーニング

プロジェクト期間中、サフロンコーヒーの主導により、苗床の管理方法や、苗木の植え方、収穫の方法など、栽培・加工に関するトレーニングなども行いました。

ミズコンポストを設置し、その活用方法について伝えたり、村で手に入る植物やたばこの葉、こぶみかんなどを使った防虫剤の作り方などを広めました。そもそも農薬が手に入りづらい環境で栽培する彼らにとって、これらが病害虫対策として役立つことが期待されます。コーヒーはすべて農薬化学肥料不使用で栽培されています。



“堆肥(コンポスト)の作り方を
知りたい”

ビエンカム郡 サー村 エオさん
22歳 女性

“加工方法をどうすればいい
のかもっと知りたい”

ビエンカム郡 フェカイ村 スントンさん
36歳 男性

設備(加工場、貯水タンク)

合計4か所に簡易加工場を設置しました。農家さん自らが精製までを行い、パーチメントコーヒーで売ることにより、より高値で販売できるようになる見込みです。また加工場には貯水タンクを設置。収穫期外には、村の生活用水として活用することも可能です。農家さんたちは、コーヒーのほかにもコメを作ったり、家畜の世話をしたり、家族の面倒をみたり、これまでの暮らしが今も続いています。今以上の仕事を求めている人は少なく、加工場があることのメリットが浸透するには時間がかかりそうです。



“使用してみたい。プロセスセンターで加工したら高く売ることができるから。”

ピエンカム郡 プートン村 ペンさん
52歳 女性

“他にもやらないといけないことがあるから、今まで通りチェリーのまま売りたい”

ポンサイ郡 チョムチアン村
男性グループ多数の意見

Outcome & Impact

成果とインパクト

数字で見るインパクト



配った苗木の本数

162,300本



設置した加工場

4か所



トレーニングの実施回数

27回



新しくコーヒー栽培に
取り組んだ人の数

473人

コメントで見るインパクト

“森林を増やしたい。もし森がなかったら土砂崩れが多くなったり、水がなくなる”

ビエンカム郡 サー村 35歳 女性

“コーヒーを植えて、その後何年も収入を得て、家族を養えるし、森（自然）を守ることもできるという希望を持てるようになった”

ポンサイ郡 チョムチアン村 46歳 男性

“コメとハト麦を減らして、代わりにコーヒーを増やしていきたい。コーヒーは4、5年たてばそのあともずっと収穫ができて収入が手に入るから”

ビエンカム郡 サー村 男性

“コーヒーの収入を、食べ物や、子ども、バイクに使った。将来家族は変わるだろう”

ビエンカム郡 サー村 43歳 男性

“収穫期に、服や薬など、家族が必要なものを買う”

ビエンカム群 フアダイ村 26歳女性

“焼き畑を減らして、コーヒーを植えていきたい”

ポンサイ郡 ホーアイロンソン村 男性

“家族と一緒にいる時間が増えた。みんな顔を合わせる時間が増えた。一緒にコーヒー畑をしているため、村を出なくてよくなった”

ポンサイ郡 ロンラット村 40歳 女性

Closing
最後に

プロジェクトを振り返って

配った苗木の本数は合計で8万本。建設した簡易加工場は4箇所、全村に精製加工や村の生活用水の貯水用のタンク、パルパー(果肉除去機)の配布など、実施したことに関する定量的な成果を挙げることはできますが、村の人々の収入が向上したり、生活力が向上したり、そういった変化を測ることは現時点ではむずかしいというのが正直なところです。

ですが、「あなたたち(坂ノ途中)がいるからサフロンが我々からコーヒーを買ってくれる。その保証があるから、安心して栽培にも取り組める。」という農家さんの言葉にもあるように、私たちの存在が農家さんたちの生産におけるモチベーションにつながっていることは確かです。

プロジェクトには期間が定められていますが、コーヒーを通じて築かれた信頼と関係性は、プロジェクトの終了とともに終わるものではありません。これからも生産地とともに歩みながら、環境に配慮した農業と持続可能なサプライチェーンの実現に向けて、(買い付けを通した)コミュニケーションは続いていきます。私たちが買い続けられることで、サフロンコーヒーも農家さんたちから買い付けを行うことができるのです。終わりのない、こうした関係性を築いていけることが、期間の定められたプロジェクトに私たちが関わることの意義でもあります。

坂ノ途中は、環境負荷の小さな農業に取り組む農家さんたちとともにあり、そこで採れたものを消費者のもとへ届けるまでのサプライチェーンのかたちを築き、新しい価値をつくらうとしています。最初にラオスに関わりはじめたのも、焼畑による環境負荷の軽減に取り組めないか、という課題からでした。

「There is nothing bad about coffee(コーヒーには何も悪いところがない)」

プロジェクト期間、何度も村に同行してくださったサフロンコーヒーのショーンさんが使っていた言葉です。

コメやハトムギ、家畜の牧草地のように焼畑も必要がなく、わざわざ森を拓くことなく植えられます。時間はかかるけれど、植えて、収穫できるようになれば、収入源にもなります。環境を害することなく生産できるのがまさにコーヒーなのです。

プロジェクトの終了間際に行ったインタビューでは、参加するほとんどの農家さんから、コーヒー生産への将来的な希望を抱くコメントが多く寄せられました。

数値として測れる成果だけでなく、農家さん一人ひとりの中に芽生えた「これからも続けていける」という実感や希望もまた、このプロジェクトの成果だと私たちは考えています。

世界の生活水準が高まる一方で生じる格差。その間にあるギャップを、持続的な生産と取引を通じて埋めていく可能性をもっているのです。

最後に

ルアンパバーンの街中から村までは、一番近い村でも3時間程度。道路は未舗装で、もっと時間がかかることも稀ではありません。そんな中、何度も何度も村を訪れ、プロジェクトの活動を遂行して下さったサフロンコーヒーのトッドさんをはじめ、プロジェクトチームの皆さんには感謝の思いでいっぱいです。

村を回りながら行う活動。村では村長さん方をはじめ、村の農家さんたちのお宅に泊めてもらいながら、また翌日には次の村を目指して進みます。火をおこし、手分けして調理し、みんなで食卓を囲むのが常でした。活動にとどまらず、生活をともにすることも、お互いを深く知り、関係性を築いていくことにつながっていると思います。

「支援の在り方はいろいろ。お金を配るだけの方法もあるけれど、あなた方やサフロンコーヒーがちがうのは、こうやってわざわざ村まで来てくれて、顔を見て、関わってくれること。これからもまたここへ来続けてください。」プロジェクトの村を訪問したときに、かけていただいたことばです。

私たちがサフロンコーヒーさんや農家さんたちと一緒に取り組んできた活動は、進歩は見えずらく、とても小さな積み重ねで、とても地道なものです。実を結ぶまで時間や手間のかかることで、それなのに実を結ぶかどうか分かりません。

それでも村を訪れ続けるのは、そんなふうに思い、ことばをかけてくださる人がいるからなのかもしれません。

農家さんたちにとって、「こうなるといいな」「こうしたいな」の希望を実現するための一助にコーヒー生産が役立っているのであれば、うれしいことです。





海ノ向こうコーヒー 未来づくり推進室

HP : <https://uminomukou.com/about/future/>

MAIL : umi@on-the-slope.com

海ノ向こうコーヒー

UMINOMUKOU COFFEE

Imagine where the story of coffee begins.



株式会社 坂ノ途中